

児童の主体的な学びを創る学校と資料館との連携

～小学校社会科における資料館の活用について～

研修・支援部 伊豆 優子

本稿は、地域の社会教育施設・教育資源である資料館を社会科の学習指導に生かす視点を軸にして、それらの文化施設と学校教育、とりわけ小学校社会科授業との連携の在り方及び、文化施設に主体的に関わる児童を育成する方策についての考察である。府内小学校に対する児童アンケート、教員や資料館及び文化財保護に関わる公的機関の職員（学芸員を含む）への聞き取り調査、博学連携を目指す視点で記された文献による研究から、学校による資料館活用の現状と課題を明らかにし、児童の主体的な学びを創造するための学校と資料館との効果的な連携方法と授業を設定する際の具体的な手順例を示した。

<キーワード>：小学校3年、小学校6年、社会科、資料館活用、博学連携、学習指導要領

1. 課題と研究の目的

1.1 課題の把握

小学校学習指導要領・社会科では、「博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること。」として、社会科授業における博物館や郷土資料館の積極的な利用を奨めている。これを受けて、社会科に限らず、児童にとって身近な地域を取り上げ、体験的な活動を通じて地域の人や出来事、(遺)物に児童を関わらせながら、社会的事象の意味や仕組みを学ばせるための様々な実践が各現場において進められている。

しかしながら、実際の取組の中では、小学校の側からは、資料館や(資料館の)展示物の「活用の難しさ」「活用方法がわからない」という声が、また資料館の側からは「資料館をもっと活用してほしい」という疑問や意見を聞くことがしばしばであった。

資料館の活用については、その重要性が認識され、実践が進みつつも具体的な内容や方法について十分な理解が得られていないのが現状といえる。

1.2 研究の目的

そのため、資料館の施設の有効な利用方法を身に付けさせたり、社会的な事象を自分自身の生活と関連付け、問題意識を持たせたりするためには、どのような指導の工夫が必要となるか、また、学校と資料館との連携方法はどうか、資料館の施設を有効に利用するための指導者の連携方法の工夫や様々な事象を自分自身の生活と関連付けて考え、児童に問題意識を持たせ社会的事象に主体的に関わる児童を育てる指導の在り方について研究を行った。

1.3 研究の方法

本研究では、3つの調査研究を行った。一つ目は小学校第3、6学年児童へのアンケート調査、二つ目は小学校教員及び資料館、文化・歴史施設職員への聞き取り調査、三つ目は博学連携を目指す視点で記された文献のうち、特に小学校社会科における博物館や郷土資料館の活用方法について論じている文献による研究である。

2. 小学校社会科等における資料館の活用

2.1 資料館の活用によって目指すもの

児童が、持続的な社会の形成者として、これらの社会を生き抜いていくためには、小学校の学習過程を通して、よりよい社会の形成に向けて主体性を持って社会へ積極的に関わり、課題を解決していく力を児童に身に付けさせていくことが必要となる。そのために、児童にとって身近な地域を取り上げ、体験的な活動を通して、地域の人や出来事や(遺)物に児童を関わらせながら、社会的事象の意味や仕組みを学ばせることが大切である。さらに、自分たちの今ある生活の歴史的な背景や、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにすることが大切であると考えられる。

2.2 小学校学習指導要領における記述

平成20年に改訂された小学校学習指導要領解説・社会科編では、「博物館や郷土資料館の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること。(指導計画の作成と内容の取扱い)」としており、「(博物館やその他の)諸施設を積極的に活用して、社会科の見学や調査活動を行うことは、児童の意欲や学習効果を高める上で、極めて重要なことである。(指導計画上の配慮事項)」など、社会科授業における博物館等の積極的な利用を奨めている。さらに、小学校の歴史学習では、通史的に展開し知識を網羅的に覚えさせるのではなく、国土に残る遺跡や文化財を調べたり、年表や文章資料などの資料を活用したりして、人物の願いや働き、文化遺産の意味などを考え、我が国の歴史に対する興味・関心や愛情を育てるようにすることを求めている、「地域の博物館や郷土資料館などの学芸員から話を聞くことは、歴史的な事象を具体的に理解する上で有効な学習である。(第6学年の目標

と内容)」としている。

2.3 博物館・資料館等の教育的意義

博物館・資料館は、そうした学習に必要な地域の歴史・文化・民族等に関わる資料が集積している場であり、貴重な遺物や史料等に触れる機会を保障する重要な教育施設である。すなわち、児童が社会的な事象への理解を深めるための様々な取組をサポートする最も重要な施設であるといえる。

また、歴史民俗博物館では、博物館学習の学習効果を下記の通り3点示している。

①歴史に関する当事者意識 実物資料を通して、歴史の臨場感を伴った当事者意識に基づく学習
②歴史認識の深まり 展示資料相互の因果関係や変遷を考えることにより生まれる歴史認識を育成
③情報活用能力の育成 博物館の多様な情報源から情報を選択し、活用することを通して育成
※出典(財)歴史民俗博物館振興会『れきはくをつかおう～博学連携のススメ』

こうした観点から、小学校の教育活動において、資料館の積極的な活用が求められる。

3 資料館活用の実際

3.1 小学校の現状と課題

3.1.1 教育課程上の特徴

小学校社会科において、一般的に資料館を活用するのは主に3年生、6年生が中心となることが多い。3年生は地域の暮らしを中心に扱い、特に3学期には昔の道具と暮らしについての学習の一環として、地域の資料館へ出向いて学習を行うことが多い。6年生は歴史学習を中心に、地域の歴史的な事象について理解を深めるため資料館や神社・仏閣等(これも広い意味での歴史資料に出合える場)の活用が多いと考えられる。

3.1.2 資料館の主な活用場面

学年	主な活用場面(例)
第3学年	「かわってきた人々の暮らし」「古い道具と昔の暮らし」 ※博物館・資料館における特設展等の時期に併せての活用が多い。
第4学年	「きょう土を開く」「地域の歴史にふれよう」 ※地域の発展に尽くした人物や地域の歴史が分かるものを調べる学習等で活用することが多い。
第5学年	「私たちの生活と森林」「木材をつくり出す森」 ※地域の産業の特色を学ぶ学習過程における関連施設の活用が多い。
第6学年	「日本の歴史」「歴史博物館へ行ってみよう」 ※各地域における歴史的特色のある時代を学習する際に活用することが多い。

3.1.3 児童アンケート調査

【児童アンケート】			
質問	回答選択肢	3年	6年
1. 社会科の学習は好きですか。	①好き	34.1%	30.3%
	②どちらかという好き	50.8%	37.4%
	③どちらかというときらい	13.0%	22.1%
	④きらい	2.2%	10.3%
2. どのような学習が好きですか。	①自分で調べて学ぶ学習	20.0%	23.6%
	②先生の話を中心に聞いて学ぶ学習	10.3%	27.2%
	③地域の方などのお話を聞いて学ぶ学習	15.1%	5.1%
	④資料館や博物館などに出かけて学ぶ学習	50.3%	37.4%
	⑤その他(班で話し合う学習、新聞を作る学習)	4.3%	6.7%
3. 資料館をどれくらい利用しますか。	①1年に2, 3回以上	36.2%	29.2%
	②1年に1回くらい	25.9%	43.6%
	③数年に1回くらい	13.0%	12.3%
	④利用したことがない	24.9%	14.9%
4. どんな目的で利用しましたか。	別表		
5. 調べ学習の方法	①本やインターネット	50.3%	88.7%
	②家の人に聞く	51.4%	37.4%
	③先生に聞く	18.4%	15.4%
	④地域の方に聞く	16.8%	3.1%
	⑤資料館・博物館	19.5%	17.4%
	⑥その他	3.2%	1.5%
6. 地域の歴史を知りたいと思いますか。	①そう思う	47.6%	20.5%
	②どちらかというと思う	35.1%	40.0%
	③あまり思わない	14.6%	30.3%
	④思わない	2.7%	9.2%

学校における博物館・資料館等の活用状況を知るため、平成24年1月中旬に、京都府内小学校2校（第3学年児童185名、第6学年児童195名）においてアンケート調査を実施した。今回アンケートを実施した2小学校の校区周辺地域には、市の資料館があり、専門知識を有した職員（学芸員を含む）が在籍しており、児童が徒歩で資料館に足を運ぶことができるなどの立地条件も加わって、比較的児童が利用しやすい条件が整っているといえる。（アンケートの内容は以下の通りである。）

3.1.4 アンケート結果から

①教科（社会科）については、約7割（第

3学年では約85%、第6学年で約68%）の児童が肯定的な回答をしている。

②約半数（3年生で約5割、6年生で約4割）の児童が、「資料館や博物館を活用した学習が好き」と回答している。

③資料館等の利用頻度について、約6割から7割の児童が、年に2、3回もしくは1回以上としている。（一方で、約2割の児童が「利用していない」と回答している。）

上記のアンケート結果から、社会科の学習の中でも「資料館や博物館などに出かけて学ぶ学習」の好きな児童が多い反面、資料館の利用頻度は年1回程度にとどまっている児童

の割合の多いことが窺える。また、調べる学習においても、多くは本やインターネット等の活用が多く、資料館・博物館等の活用を調べる学習の手段としている児童はまだまだ少ないことがわかる。利用目的は下記アンケート項目の通りである。

【アンケート項目4】		
4. どんな目的で利用しましたか (記述式)	3年	資料を探すため、社会科の学習(展示物の見学)、授業で出た質問を調べるため、昔の暮らしを調べるため
	6年	社会科の学習(展示物の見学)、市町の歴史について調べるため(資料館で学芸員さんに地域の話聞くなど)、総合の歴史パンフレット作りの調査

このことを踏まえて、資料館を学習場面において具体的に活用する方法を児童に確実に身に付けさせるとともに、児童の学習課題と合致させるねらいを持ち、資料館を効果的に活用させるための指導の充実が求められる。

3.2 博物館・資料館等の現状と課題

博物館・資料館等は、歴史、民俗、産業等に関する実物、模写、模型、文献等の資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般市民の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究を行う機関である。常設展示や企画展示、図録等の書籍頒布等に取り組むとともに、学校教育にも様々な形で積極的な協力をしている。

今回研究を進めるに当たり、府内3機関の資料館等の職員(学芸員)に学校との連携という視点に限定して、現状と課題についての聞き取り調査を行った。以下に主なポイントを挙げる。

3.2.1 現状と課題について

・小学生の利用に際して、社会科、総合的な学習の時間等における児童の学習内容、学習時期等について理解し、児童の調べ学習等に対応できるよう資料館の展示見学や出前授業

などを実施している。

・資料館の施設(展示物)の見学や学芸員やボランティアガイドの話聞くなどの学習活動の実施に当たり、学年(学級)担任教員との打ち合わせの時間をできるだけ確保するように心がけている。しかし、実際には当日の見学・説明に至るまでの十分な打ち合わせがなされないまま児童の学習活動が行われている現状もある。

・資料館の学芸員は実証史学に厳密であるが故に、教師の授業実践とつなげて考えにくい場合がある。教師が行う歴史教育の場合、ある程度の歴史の流れを教える必要があり、資料館側に実証性のみを問題にされると、指導のための地域教材が作成しにくい。

3.2.2 学校の課題について

・展示の内容について「教科書と同様のものを展示してほしい」という要望が、児童や地域の歴史を教える教員から多く寄せられるとともに、教科書に載っていない地域独自の文化財や道具類に関心を示さない児童が多くなってきた。教科書で広くどの地域でも知られている文化財の特徴を知ることは重要なことであるが、その地域独自の文化財は、地域の特色や人々の暮らしを直に知ることができる貴重なものである。そうした地域の伝統的な暮らしの様子や歴史的な意義を次の世代を担う子どもたちにしっかりと引き継いでいくことが大切であると考えられる。

・児童の地域環境からも学びたいという意識をもっと持たせる工夫が必要である。また、児童に具体的な利用の仕方を学ばせることが重要である(教師も同様)。その際、教師自らが様々な地域素材を集めて教材を工夫・開発する努力が必要である。

・教育的配慮(子どもの理解力など)と専門性(史・資料の取扱い)は安易に対立させて考えることはできない。折角の地域の素材と児童の出合いのチャンスの芽を摘んでしまわないようにすべきである。

資料館は「見学するところ」という認識に基づき、一度の見学でその役割が終わると考えていることが多い。地域の資料館に足繁く通い、「教材を探す、見付ける場所」と位置付けて活用する意識が重要であり、資料館は「見学するだけでなく使うもの」という発想を持つ必要がある。

4 博物館・資料館等の活用の充実のための連携の在り方について

4.1 学校ニーズの明確化

まず、資料館の文化施設との連携を図る上で重要なことは、資料館との連携を図りやすくするための環境整備である。連携を実際に行っていこうと考えたとき、時間的な制約があり、学芸員と教員の打ち合わせの時間が十分に確保できないという課題がある。

限られた時間の中で、学校と資料館の双方が学習のねらいを共有してそれぞれの役割を明らかにするためには、まず学校側が、資料館の持つ素材や機能のうち、どのようなものが必要なか明確にしておかなければならない。

すなわち、児童の実態に即した授業を組み立て、指導を行うためには、実際に指導に当たる教員が学習内容の中で資料館の学習素材の活用がどのような位置付けとなり、その後の学習にどのような影響を与えるものであるのかを的確に把握し、最大限学習効果を得られるよう企画・調整することが必要であろう。

4.2 学校と博物館・資料館等との連携方法の工夫

学校と資料館との連携を行う際、資料館の展示物などの資料にどのようなものがあり、それが指導学年の単元の学習にどのように関連付けることができるのかを事前に把握しておく必要がある。その際、指導者(学級担任)と資料館学芸員との打ち合わせは必要不可欠である。教師が下見を行う際に、資料館の学

芸員との事前の打ち合わせの機会を使って、資料館にある学習素材を紹介してもらうなど、それを児童にどのように提示するかを相談することも重要である。資料館の展示物等をどのように位置付け、発展させ、授業を組み立てていくのかは、指導者である教師が主体的に設定していく必要がある。その上で、施設の方に必要な情報の連携・協力を求めるスタイルが望ましいのではないかと考える。可能であれば、課題設定の段階での連携も、計画的、効果的な学習を進める上で重要であると考えられる。

資料館の展示物等を専門的立場から紹介していただく場合も、それを聞く児童がどのような学習を経て、どのような社会的事象に興味・関心を持っているのかを事前に共通理解しておくことが大切であると考えられる。

4.3 博物館・資料館等の活用の類型

学習過程の中で、資料館の活用をどのように位置付けるかについては、学習のねらいや児童の実態、博物館(資料館)の特性によって異なる。

前述の一場郁夫氏は、「歴史発見歴博活用のアイデア(歴史民俗博物館振興会 1999年)」の中で、学校での博物館活用を、①博物館活用A型【課題発見型】(導入段階)、②博物館活用B型【問題解決型】(展開段階)、③博物館活用C型【調査活動型】(展開段階)、④博物館活用D型【学習整理型】(まとめ段階)、⑤博物館活用E型【発展学習型】(発展段階)の5つの類型に分類し、それぞれの学習の流れを示している。これらの類型と期待できる学習効果は次のように考えられる。

①の学習は、博物館学習→学習課題→調査活動→まとめへと進める。これは、単元の学習に入る前の導入段階で自由に展示物を見学したり体験活動をしたりすることによって一人一人が自分の学習課題を見付けることができる。事前学習を行わないため、歴史的事象との新鮮な出会いの場を設定することができ

るとともに、児童が関心を持った展示資料に基づいて多様な学習を展開することができる。

②の学習は、学習課題→調査活動→博物館学習→まとめへと進める。これは、学校での授業において自分が設定した学習課題に沿って様々な資料を活用して調査・研究した後で、地域の歴史などもっと詳しく知りたいと思う学習内容についての調査活動を博物館において行うものである。基礎的な知識を得た上で自分の関心のある課題を追究できる学習過程であるため、児童の主体的な学習活動が期待できる。

③の学習は、学習課題→博物館学習→調査活動→まとめへと進める。これは、学校の授業において学習課題を設定した後、博物館で体験活動や調査活動を行う。実物に触れ、体験したことなどを再度学校で資料等を使って確認する学習過程により、当時の人々が生きた時代をより一層身近に感じ、歴史認識を深め、意欲的な学習を展開することができる。

④の学習は、学習課題→調査活動→調査活動→博物館学習・まとめへと進める。これは、学校で学んだ学習内容を整理・確認するための学習過程である。児童が課題意識を持って学習を進めるので、児童一人一人の歴史認識を一層深める学習を展開することができる。

⑤の学習は、学習課題→調査活動→まとめ→博物館学習へと進める。

学習計画に基づく調査活動で得られたことを整理する中で、新たな課題やさらに深めたい内容について、博物館・資料館で学ぶことにより自ら主体的に学び続けるための力を培うことにつながる。指導者は、一人一人の学習課題を把握し、的確に支援を行うことが求められる。

上記の分類を踏まえ、学習のどの場面で、何の目的を持って資料館を活用するのか、目的意識を持った指導が求められる。また、資料館の活用を目的とする授業を設定するときの手順を指導者が把握し、実践することが重

要であると考え。このことを踏まえ、施設活用における授業設定時の手順を示した。

4.4 授業設定時の手順（例）

4.4.1 教師による施設や展示物等の事前確認 （学習活動を単元計画のどこに設定するかを決める）

授業を進めるに当たって、教師自身がまず地域の特徴を理解することが重要である。自ら地域に出かけ、地域の社会事象を実感することで、児童に学ばせたい教材に出会うことができる。その上で、教師自身が気付いた地域にある学習素材と学習指導要領で求める内容とが適合するかを見極めるとともに、単元の核となる指導内容を決定していく。

また、教師が事前に資料館を知るために、学校の図書室や職員室等に地域に関わる書籍や雑誌（博物館の図録、館報、目録、パンフレットなど）を集めて配架し、教師が日常的に活用できるようにする。このことにより、教師の下見の直前に、どのような博物館、資料館であり、過去にどんな展示をしていたかを把握しておくことも大切であると考え。

4.4.2 博物館・資料館等の学芸員との事前 （事後）の打ち合わせ

資料館にある学習素材を紹介してもらい、それを児童にどのように提示すれば、より学習効果が得られるかを相談する。

その際、教師は単元に向かう子どもの実態や意識を事前にしっかりととらえ、資料館側と十分に意思疎通を図っておくことが重要である。そのことにより、実際に展示物や資料を紹介する際のポイント等も明確になり、より学習効果が高まると考えられる。（可能ならば）資料館での学習日だけでなく、事前・事後の学習計画も資料館側に伝えておくことが重要である。例えば、第3学年での、「昔の道具や暮らし」についての説明を施設の方にさせていただき、児童の今後の学習予定を理解していただいていることで、より単元の

ねらいに沿った活動が期待できる。

4.4.3 具体的な学習場面をに想定した単元指導計画を作成

単元を構成する際、単元で育てたい児童の具体の姿を教師が想定しておくことが重要である。児童の学習状況を適時適切に捉えながら、児童が自分で学習課題を見出し、主体的に追究できるような単元を構成することが大切である。次に、教科書との関連を調べることである。教科書における内容の取扱いと学び方等を十分に比較・検討し、学習場面で児童がより意欲的、主体的に学ぶことができるような内容の提示の仕方や学び方を考えることが重要である。

4.4.4 博物館・資料館等の学芸員に学習結果を評価してもらう場を設定する。

児童自身がこれまでの学習活動を振り返り、その成果を実感するとともに、児童の学習活動に関わった指導者がそれぞれの指導について振り返り、その成果と課題を共有することにより、単発的な学習(見学)の経験に終わることなく、生涯にわたって資料館等の社会教育施設と児童を結ぶ関わりを継続していくことにつながる。

4.5 児童に対する指導の在り方

4.5.1 施設利用の方法に関する指導

施設を利用するに当たって大切にすることは、何のために施設を利用するのかという目的意識を持たせることである。事前に課題を持ち、活動の目的をはっきりさせておくことが大切であると考え。課題を明確に持つことによって見学への取り組み方が違ってくる。課題をしっかり持たせるために、授業の中で見学の意図を明確にするための話合いの時間も十分確保する必要がある。問題解決に向けての意欲と見通しを持つようにすることで、児童が意識的に見る、聞くようになり、学習活動が充実したものになると考える。社

会的(歴史的)事象について知ることの面白さや(歴史的)価値を感じ取らせることが、博物館や資料館の活用の主たる目的である。このことから、見たり、物に触れたりする時間や活動を十分に確保することが大切であると考え。

施設を学習に活用していくためには、施設の使い方に慣れ、施設を使って学習を行っていくスタイルを学んで行くことが必要である。そこで、見学の事前指導で調べ方や見学の仕方、質問の仕方などを学習する機会を設定し、自力で解決する方法や能力を身に付けるようにすることが大切であると考え。小学生にとって、社会教育施設の活用方法を身に付けていくことで、地域の発展に尽くした人材や(遺)物など地域を知るための第一歩になる。資料館の活用を通して、施設の活用方法を身に付け、学び方に慣れることにより、児童は今後も他の施設を有効に活用できるようになってくるのではないかと考える。

4.5.2 課題意識の醸成

前述の一場郁夫氏は、学習過程の中に位置付けた博物館学習の類型とともに、児童に醸成しておきたいこととして、次の3点を指摘している。

- ①児童の学ぶ意欲・知的好奇心を十分高められているか。
- ②児童の学習課題は博物館でなければ解決できないものになっているか。
- ③博物館の特徴を活かした学習活動が用意されているか。

児童が自らの課題意識を基にして調査活動を進める過程で、資料館を活用することにより、児童の学びは一層深まる。例えば、導入段階での資料提示や発問の仕方によって児童の課題意識は全く異なったものになる。この過程を大切にすることによって児童は自らの学習課題を追究するようになる。また、本やインターネット等からの情報、児童相互の情報交換、相互評価などを適切に組み合わせる

ことにより、資料館で得たいものが明確になる。つまり、教科書や資料集では確認できない、実物資料を見ることによって大きさや形を実感することや、同じ空間の中で他の資料と比較してみるといった三次元的ともいえる学習の展開が期待できる。そのことは、資料館の活用場面を、「導入」・「展開」・「まとめ」のどの部分に位置付けるのかに関わらず、児童の学習進捗の各段階における新たな課題意識につながるものとなる。

さらに、資料館において実物に触れる活動を通して、我が国の歴史・文化・風俗等に対する理解を深めることは、やがて愛着や誇りといった心情面の醸成にもつながると考えられる。

5 おわりに

博物館・資料館等に展示された(遺)物をただ見学したという感想で終わらないようにするためには、(遺)物の背景にある人間の生活や知恵などの姿を児童が捉えられるようにすることが大切であり、それらが語る姿を積極的に読み取ることのできる力を育てる必要がある。

そして、資料館等の展示資料から歴史、文化に触れる活動を通して、児童の心の中に(遺)物に対しての畏敬の念が生じ、その心がやがて我が国の歴史、文化、伝統を大切にしようとする心情に発展していくと考える。

そのためにも、今後、学校における資料館を活用した学習活動を年間計画の中に明確に位置付け、計画的に実践できるようにしたい。

資料館(学芸員)から学ぶと同時に先輩教員の多くの優れた実践から学ぶことにより、資料館の新たな活用方法を知ることが重要である。多くの教師の実践を一過性のものに終わらせることなく、記録し再検討しつつ継承していこうとする姿勢が必要であると考えられる。

【 謝辞 】

本研究の調査に御協力・御助言をいただいた京都府内の市町教育委員会及び社会教育施設、小学校に深く感謝申し上げます。

最後に、今回の研究に当たり、様々な助言をいただき多くの示唆を与えてくださった、大山崎町歴史資料館長補佐 福島克彦様、向日市文化財調査事務所長 渡辺博様、向日市埋蔵文化財センター次長 松崎俊郎様、向日市文化資料館主幹 玉城玲子様にご心より厚く御礼申し上げます。

<参考・引用文献>

- 一場郁夫(1999) 歴博ブックレット歴史発見！
歴博活用のアイディア (財)歴史民俗博物館振興会
- 木村誠(2009) 歴博ブックレット29教室を博物館につなぐ小学校の授業 (財)歴史民俗博物館振興会
- 北俊夫・埼玉県博学連携推進協議会(2001) 博物館と結ぶ新しい社会科授業づくり 明治図書出版
- 北俊夫(2001) 新教育課程と社会科の授業構想 明治図書出版
- 堀田龍也・高田浩二(2002) 教師のための博物館の効果的利用法 高陵社書店
- 堀田龍也・高田浩二(2002) 博物館をみんなの教室にするために 学校と博物館がいっしょに創る「総合的な学習の時間」 高陵社書店
- 水藤真(2007) 博物館学を学ぶ―入門からプロフェッショナルへ 山川出版社
- 伊藤寿朗(1993) 市民のなかの博物館 吉川弘文館
- 全国大学博物館学講座協議会西日本部会(2008) 新しい博物館学 芙蓉書房出版
- 文部科学省小学校(平成20年3月)「学習指導要領解説社会編」